

兵庫県伊丹市大字 御願塚の小字地名（「地域研究いたみ第15号」より）

はじめに

「右も左も平らな畑地の真ん中に、広い道が通っていて、その真っ正面の森の中にこの村方5百石を支配する岡野(旗本)の代官陣屋の黒い門と白壁を塗った屋敷が見えていた。」

これは子母澤寛の小説「父子鷹」に描かれた幕末期御願塚村の一風景である。現在では御願塚の集落を横断して新幹線が走るなどすっかり様子が変わってしまったが「御願塚」の地名は「御願塚〇丁目」という形で残っている。ただし、かつての御願塚村はそれらにさらに稲野町・若菱町・南町・平松・南本町の全部、または一部を加えた広い地域であった。以後、この広い「御願塚」について述べる。

「御願塚」という地名は「昆陽」と並んで他市の人には読みにくい名称だが、この地名の由来にはいくつかの言い伝えがある。一つは、かつてこの地に5つの古墳があり「五ヶ塚」とよばれていたことに由来するというものである。現在阪急稲野駅の西にある御願塚古墳(前方後円墳)はこの5つの塚の一つと言われている(御願塚・掛塚・満塚・温塚・破塚)。また元禄14年(1701)に刊行された地誌「摂陽群談」には天平時代、聖武天皇の御願成就を願って、僧行基が四十九院を開き、その中心の塚をこの地に築いたため御願塚といわれるようになったという由来が紹介されている。

なお、「御願塚」の確実な文献上の初見は「文禄三年(1594)御願塚村検地帳」(伊丹市立博物館所蔵)であるが、「細川両家記」の天文18年(1549)の記事に「御影塚」という地名が見られ、これも御願塚のことと推定される。

さて、地名は人々がその地に住み着くと同時にあらわれ、その後、宗教・文化、地域との様々な関わりを経て移り変わるため、地区によって昔から単一の地名と呼ばれてきた場合も、地名が何度も変遷してきた場合もある。従って、ある地域の地名を研究する場合、まず、ある時期の全地名を復元し、その後、時代を上がったたり下がったりして研究を深めていくことが必要になる。

御願塚の地名調査を始めるにあたり、明治初めの地租改正の際、制度的に整理された小字を基本とすることにした。御願塚村はこの時31の小字に分けられている。その後、明治22年の市町村制の実施に伴って現伊丹市域は伊丹町・稲野村・神津村・長尾村の4つに統合され、御願塚村は稲野村大字御願塚に変わったが、昭和10~20年代に行われた稲野耕地整理に至るまで小字には変更は加えられなかった。耕地整理前後では、名称は同じでも場所・面積が異なる場合があるので注意を要する。その後の町名変更や住居表示制度の実施によっても変化している。例えば、「文禄三年御願塚村検地帳」に見られ、最近まで残っていた地名として「温塚(オンヅカ)」(検地帳では「ぬくめつか」とある)「大越(オオゴシ)」などがあげられる。

御願塚の小字（明治初期の小字を中心に）

1. イノキ（猪木）御願塚1・2

「イ」が「井」、つまり農業用水を意味する例は各地の地名で見られる。イノキの場合も、北西部には村の灌漑用溜池(御願塚新池)があり、重要な取水口にあっていた。従ってもともと「井の口」の意味を持っていたのではないだろうか。「キ」はアイヌ語で禾本科植物をあらわすが、不明である。

2. 廣田 (ヒロタ) 御願塚1・2・6

この小字は「文禄三年御願塚村検地帳」でも見られ、他の小字と比べると随分、耕地総面積が大きい。このことから広田となったのではないだろうか。

3. 池の上 (イケノカミ) 鈴原町1~5、梅ノ木6、御願塚1・6

御願塚新池(昭和 45 年頃まで池であった。その後女性児童センター、児童会館と変遷)の上側に位置する所から池の上と呼ばれる。

「天保 13 年(1842)伊丹西台分間絵図」を見ると、新池は加茂井(カモユ)(川西市)の分流・西之堂井から取水していたようだが、明治期には昆陽井から水をひくようになったということだ。この池は昭和 10 年代に掘り下げられ、その土は阪急電鉄が新伊丹住宅(現梅ノ木)を造成する際に使われた。「あの時は土が真っ白になるほど貝殻が出た」ということである。現在残る「池ノ上」との関係は事項で述べる。

4. 七町田 (ナナマチダ・ナナマツタ) 七々町田

「町」はチョウ読みで尺度、面積の単位で使われるほか、マチと読んで田畑の枚数を数える際にも使われる。(一枚の田畑を一町、二枚なら二町という)しかし、この七町田とこれらの町との関係は不明である。

七町田には御願塚古池があり、「昆陽井筋絵図」(年代不明)によれば、昆陽井から取水している。この池は自然地形を利用して二面に土堤を築いて造られた浅い溜池だったので、明治の末頃には泥が溜まり、溜池の用をなさなくなり、その後は蓮が植えられていた。

七町田は稲野耕地整理により「池ノ上」に編入され、「七町田」という小字は消えた。その後、旧七町田を除く「池ノ上」は住居表示制度の実施(昭和 49 年 9 月 1 日)によって御願塚六丁目に変わったため、池ノ上として残っていたのは明治初めには七町田であった区域のみとなっている。これは地名は残っていても場所が異動するという注目すべきケースである。

5. 勘ノ田 (カンノデン)(勘野田・カンノ田・神野田) 御願塚2・3・7

北野山大神宮(御願塚の北社)に隣接している区域で、神田の意味から来た地名であると思われる。「神野田」と記載されている文献もある。「神田」とは神に供える米を作るための田で、多くの場合村共同で、もしくは祭祀関係者数軒によって耕作される。御願塚の場合も、「御願塚村三社宮座文書」(山内清一氏所蔵)中の「元和二年(1616)・宮中覚」に八月に宮座(※)の行事として稲刈りを行い、土用三日前にはその必要経費として宮座の会計から稲25把を支出する、という記載が見える。おそらくこの時共同で耕作された田が神田であろう。

なお、山陽新幹線の敷設に伴い須佐男神社(御願塚の中社)が北野山大神宮の境内に奉遷された後は、この神社は北野山大神宮より須佐男神社と呼ばれることの方が多くなった。

※御願塚宮座については「伊丹市史」第二巻 42~44 ページを参照

6. 上ノフケ (カミノフケ) 御願塚7・8

「フケ」とは湿田のこと。この地域は湿地で麦作は出来ず、米のみの片作であった。村の中心部の北側にあたるどころから、「上ノフケ」とされたものであろう。

7. 大越 (オオゴシ)(大越田) 御願塚2・3・7

この地区は東隣接の上ノフケとは対照的にかなり高いため、御願塚古池から流れ出てこの地区の東側(上ノフケとの間)を通る御願塚用水黒廻り溝からも、西側を通る水路(御願塚領と

南野領の境界をなす)からも取水できなかつた。「昆陽井筋絵図」(年代不明)によれば、この地区への取水は南野領から3つの掛樋で水路を大きく越えて行われている。大越の名前の由来はこれによるものではないかと推定される。

この地域は日照りの時には水に苦勞し、米はいつも不作であったという。

8. 西ノ口 (ニシノグチ) 御願塚3・5・7・8

御願塚村と他村を結ぶ重要な道は2本あつた。1本は伊丹郷町へ行く道。もう一本は南野村を經由して東富松村(尼崎)へ行く道である。伊丹郷町へ向かう起点は北ノ口と呼ばれ、(前出)東富松村へ向かう道の起点は西ノ口と呼ばれた。

西ノ口には、明治7年、南野領の柏木古墳上にあつた南野・御願塚共用の墓(一の辺三昧)より移転した村墓がある。村ではこの墓を旧村墓に対して新墓と呼んでいる。

9. 西浦 (ニシウラ) 御願塚5・8

御願塚集落の西側に位置するところから西浦と呼ばれたのであろう。「浦」については「東良」の項参照。

10. 宮巡 (ミヤマワリ) (宮廻り) 稲野町7、御願塚4

御願塚古墳上にある南之神社の周囲を取り巻く地域であるところからついたと思われる。最近「ミヤメグリ」と呼んだりもするが、正確には「ミヤマワリ」である。

11. 別当 (ベツトウ) (別當) 稲野町1・3・4・7、御願塚3・4

前述の御願塚三社宮座関係文書のうちの文政5年(1822)「南宮孝徳天皇雨覆修覆願書写帳」に「別当昆陽寺宝持院覚心」という記載がある。他の文書にも昆陽寺宝持院が宮の修復時に祈禱し、布施をもらっている例がある。さらに元禄5年(1692)の「御社吟味帳」にも「遷宮者代々真言宗高野山西禅流末寺 川辺郡崑陽寺宝持院」とある。宮の修理、建築の度に昆陽寺の僧侶が「別当」として祈禱し、神体を奉遷する役目を果たしていたのであろう。もともと「別当」とは本官あるものが別に他の職にあたるという意味である。

この「別当」が小字名と何らかの関係があつた可能性は考えられる。別当職の寺の土地があつたとか、別当への布施を賄う共有地であつたなど。他地域にも宮の近くに別当という小字のある例が見られるので、比較対照しながら、今後究明していきたい。

12. 専額 (センガク・センガリ) 御願塚8

明治8年の丈量図には「センガリ」とあるが、文禄の検地帳には、「せんかく」と記載されている。「日本民族資料事典」に「分水の調整には水路に検断木(ケンダンギ)という定木を置き、あるいはセンガンと呼ばれる装置を設け、水位を確かめるため、ヨコイなどの堰を造り、増水にはハヤクチという栓を抜いたという」という記事があるが、センガンとセンガクの関係は不明。

13. 貝毛 (カイケ) 稲野町4~7、御願塚4・5

御願塚村集落の南、南之神社の西に位置し、文禄の検地帳には「かい地・かいち」と記載されている。カイチとはカイトと同義で「垣の内」つまり集落の境界域をあらわすという。この小字も集落の南の境界に位置しているから「垣の内」からの由来として見てもよいであろう。

14. 勘定舗 (カンジョウシキ) (勘定敷) 稲野町3~6

勘定舗は御願塚古墳の南に位置する。かつて古墳から南へ向かう「のがい道(野道)」があつた。村から出る野道に神明繩(シメナワ)を張る勧請繩の風習は各地にみられるから、ここで

も行われていたのかもしれない。あるいは、勘定鋪の田の収穫の一部を村勘定(村財政)に充てていたのかもしれない。推理はいろいろできるが、裏付けとなる資料は発見できなかった。

この地区は今で言うと池田銀行稲野支店の少し南側にあたるが、土地が高く、水に苦勞したようだ。東へ行くと土地が低くなるので、土を取って西の代あたり(現稲野町 2 丁目)に馬で運んだこともあるという。明治 12 年「御願塚村全図」には勘定敷とある。

15. 庵ノ前 (アンノマエ) 稲野町5・6、若菱町4・5

『尼崎市史』第十巻に次のような民話が紹介されている。

茨木童子

尼崎市東富松村のある百姓に男の子が生まれた。その子は生まれたときすでに歯が生えており、髪も長く成人のようであった。一族の人びとは恐ろしく思ってその子を島下郡茨木村(茨木市)のあたりに捨てた。捨てられた子は大江山の酒顛童子に拾われ、茨木童子と名づけられて育てられ、その部下となった。あるとき父と母がともに病気であることを知った茨木童子は、心配し悲しんでいたが、ついに決心して父母の病いを見舞うために東富松の父母の家に訪れた。驚く父と母に自分が今日まで育ててきた事情を話しあかした。父と母は、童子に食物を与えたりしてねぎらったが、一族の人びとは成長して見るからに猛々しい容姿に一層おそれおののいた。童子は「自分はいま洛陽東寺の門に住んでいるが、再びお訪ねすることはむづかしい、これでお別れです。」と家を出ていった。父と母は人に頼んで追いかけてもらったが、間道を狐のとぶような早さで走って行くので、追っていった人もついに姿を見失ってしまった。東寺に住んでいるのならそこに安住できるように、と願う父母のこころを察して、童子の生まれた土地は「安東寺」と呼ばれるようになったという。

さらに尼崎市東富松には、その後、茨木童子の両親が子を思って庵を立て念仏三昧をとこなえたという話が伝わっている。

安堂寺という地名は、現塚口小学校付近(尼崎市安堂寺)、南野字東安堂寺、南野字西安堂寺の三カ所に見られ、これらは伊丹・尼崎の市境界一帯にかたまっている。一方、庵ノ前という地名は安堂寺より東側に南野字庵ノ前、御願塚字庵ノ前として見られる。これらの「安堂寺」「庵ノ前」という地名は前述の茨木童子の民話のゆかりのものであると思われる。

16. 西ノ元 (ニシノモト) (西ノ本) 若菱町4

17. 東ノ元 (ヒガシノモト) (東ノ本・東之本) 若菱町2・3

野元(ノモト)と呼んでいた。高瀬川で東西に分けていた。

18. 丸町 (マルマチ) 稲野町3、若菱町1~3

丸町という小字は、伊丹市域では寺本村にもあるが、両者の類似点共通点は見当たらない。御願塚村の丸町は、比較的面積が小さく、区域内に里道・水路が無いから、一区画(一枚田)の意味であろうか。

19. 西ノ代 (ニシノダイ) 稲野町1・3

十六区画(筆)にわけられ、そのうち上田・下田に分けられ、同じ面積でもそれぞれ米の取れ高は違っていたが、一面の湿地で、石高はよかった。

20. 東ノ代 (ヒガシノダイ) 稲野町2

文禄の検地帳等には「の大・野たい・のたい」とある。西ノ代・東ノ代の間は水路で分けられ、この水路は刈分(塚口村刈分)の方へ流れていた。野代(ノシロ)は自然堤防のことだが、関連は不明である。

西ノ代は前述の勘定舗の東側にあたり、勘定舗に比べてずっと低くなっていた。そのため、西ノ代の西側を流れる高瀬川は度々決壊し、橋が流された。(明治7年に決壊した記録が確認されている。)この橋流れを防ぐため、高瀬川の水車小屋(現稲野町3丁目筥米穀店)付近には大きな石橋がかかっていたという。この石橋のうち一枚で筥惣一氏の先祖が供養のため寄付したもの(戒名が彫ってある)が現在、須佐男神社境内の腰掛石になっている。

21. 上掛塚(カミカケヅカ)(上懸塚) 稲野町1・3

22. 下掛塚(シモカケヅカ) 稲野町1・2

この地区には五ヶ塚のうちの一つ掛塚があったので、そこからきた地名であろう。御願塚の人々は普通、上・下と分けず、単に掛塚と呼んでいた。文禄の検地帳にも「かけつか」と見える。

なお、この地区は明治後期以前は綿花を栽培しており、上々田であった。

23. 温塚(ヌクメヅカ) 稲野町1・2

温塚は五ヶ塚のうち的主墳(御願塚古墳)に次ぐ大きな塚で、粘土で盛り土してあった。この粘土を地元の百姓が土臼の材料としたため、塚のあちこちに穴があいており、雲雀の巣のようだったという。大正8年に阪急電車の新設軌道敷用盛土として採土され、その後、稲野耕地整理でなくなった。なお、「ヌクメヅカ」と読み「オンヅカ」とは呼んでいなかった。文禄検地帳にも「ぬくめつか」とある。

稲野耕地整理で西ノ代の一部が温塚に統合され、その後、この旧西ノ代以外の温塚地区は稲野町二丁目に町名変更された。従って、現在温塚と呼ばれている地域は明治初期には西ノ代だった地域であり、前述の池ノ上と同様に地名が移動したことになる。

24. 瓢箪田(ヒョウタンダ) 稲野町2

地図を見ると瓢箪の形をしており、地形からきた地名であると思われる。

25. 下焼野(シモヤケノ) 南町4

26. 大焼野(オオヤケノ) 南町3・4

27. 畑焼野(ハタヤケノ) 南町2・4

焼とは水利が悪く作物が日焼けすることで、このような地域を焼野と呼んだ。古老の話によると、この三字は水の便が悪く、他地域に比べて畑が多かったそうである。主に大根・茶が栽培され、水は伊丹の落ち水を使っていた。

畑焼野の字限図を見ると、爪でひっかいたような畑がある。村の各家庭はこの畑を一筆ずつ所有して大根畑とし、各持畑の境界には茶を植えていた。

28. 東良(ヒガシラ) 南町1・2・4

御願塚古墳の東側に位置する。「ヒガシウラ」の母音「ウ」を省略して、「ヒガシラ」に転化したも

ので、前述の西浦に対応するものと思われる。「ヒガシウラ」「ニシウラ」の地名では、浦は日当たりの良い場所を指すという説もある。この地域も日当たりの良い上田だったがこの説にあてはまるかどうかは断定できない。

この地域は御願塚新池の水がうまく引けたため、他地域に比べ、一反につき米2〜3斗は多く収穫できたという。

29. 堂天良(ドテラ)御願塚1・2・3

土地が低く、米は良くとれた。地名由来は不明。

30. 中通(ナカドオリ)御願塚3〜5

一般に〇〇通という地名は××筋と並んで街路を表すことが多い(大阪市など)。しかし、御願塚村には他に〇〇通という地名が無いこと、また「明治十二年御願塚村絵図」ではこの字は「宅地」という字名で記載されていることなどから、単に村の中心を表しているとみて良いであろう。

ちなみに、伊丹市域でこれ以外に「宅地」という地名があった所は荻野村(東宅地・北宅地・中宅地)・大鹿村(一号宅地〜四号宅地)の二カ村である。やはり村の中心だが、寺を取り囲むように「宅地」地名が配置されているため、これらの宅地は寺を中心に開発されたものであると考えられる。

31. 北ノ口(キタノグチ)梅ノ木2・4、御願塚1〜3

古くは、御願塚村と伊丹郷町を結ぶ道は一本しかなかった。この道の伊丹郷町側の出口は「文化改正伊丹の図」(1836 に写したもの)に「御願塚口」として記載されている。(現在の南本町1丁目バス停留所西側にあたる)

一方、御願塚村宅地側の北入口に当たる所がこの北ノ口である。この道は伊丹町西部耕地整理(昭和11年6月9日完了)により無くなった。

以上の小字の順序は字限図の御願塚村全図にうたれた字番号によっている。北ノ口のみは字限図の全図に見えないが、小字毎の一筆図にはある。

32. その他 満塚(ミツヅカ)御願塚2〜4、南町1・2・4、平松7

稲野耕地整理により新しくできた小字。五ヶ塚の一つがあったと言われている地域。

33. その他 塚崎(ツカサキ)南町2〜4

稲野耕地整理により新しくできた小字。掛塚・温塚・満塚の地先で塚崎となった。

34. その他 掛塚(カケヅカ)稲野町1・2、御願塚4、南町2・4

稲野耕地整理により新しくできた小字。それ以前は上・下に分かれていたが、村の人々はずっと両地域とも掛塚と呼んでいた。五ヶ塚の一つ掛塚があったらしい。

35. その他 なまづがいち

明治以降、行政上の小字の中には見当たらないが、御願塚の人々の間で伝えられており、文禄の検地帳にもみられる。

御願塚村こぼれ話

夏越祭(ナゴシマツリ)

御願塚村には、上社(北野山大神宮)・中社(須佐男神社)・下社(南之神社)の3社がある。

上社は村の北側に位置し、地元では「北の宮」と呼んでおり、天照大神を奉斎している。中社は中ノ宮と呼ばれ、かつては村の中心部に位置していたが、昭和46年の山陽新幹線開通に伴って北ノ宮の隣地(中通 986 番地)に奉遷された。氏神は須佐男命である。下社は御願塚古墳上にあり、孝徳天皇を奉斎している。村の神事はこの中ノ宮が中心となって執り行われていた。その中から昭和 17・8 年まで行われたという夏越祭について紹介する。

須佐男神社宮司・善見信典氏 談

夏越祭は毎年7月23日に宮座役員10名、若方座役員10名によって行われる虫封じの神事である。神事は、宮座座頭が直垂装束を着し、社殿前庭の所定の座につくところから始まる。次にチワラ所役2名が(宮座から1名、若座から1名)上下袴を着し、各々チワラ巻の端ノナワを持ち、所定の座につく。チワラ巻とは、葉のついた二間(約3.6m)の長さの青竹にチワラという植物を直系1尺5寸(約45cm)の太さに巻きつけ、竹の両端にナワをつけたものである。チワラ所役はチワラ巻をナワ跳びのナワのように右に3回まわして地面に置く。座頭は金幣を左右にふりながら、チワラ巻きを渡る。この所作は3回繰り返される。これが終わると同時に、参拝者は我れ先にチワラ巻からチワラを抜き取り、そのチワラに小麦ワラを添えたものを自分の田畑の水口に立てて虫封じとした。

座頭以下所役、役員は拝殿の所定の座につき、虫封じ神事の終了を神に告げ、次に斎庭(イニワ)に向かって当屋の準備した麦餅(小餅200個程度)を撒き、神事を終える。

このチワラ巻を使った神事は後に湯立神事(※)にとってかわられ、湯立神事の方は現在も続けられている。

※湯立神事:釜で沸かした湯に竹の枝を浸した浄めの湯を参拝者にふりかける神事

阪急稲野駅の話(安達清七氏他 談)

阪急伊丹線が大正9年7月に開通した当時は稲野駅は無かったですわ。開通前、用地買収の時、買収にあたって阪急の人が「御願塚村に駅を作る」いうことを簡単に約束してしもとった。そいで御願塚村は「約束通り駅を作れ」と陳情した訳やけど、阪急側は御願塚の人々に年1・2回乗ってもろても採算があわんちゅう。そんなら稲野地区を開発するいう条件を付けよう、つうことで駅が出来たんですわ。駅名の「稲野」は、当時の稲野村長が稲野12か村(池尻・昆陽・御願塚・千僧・寺本・中野・西野・野間・東野・堀池・南野・山田)で初めて出来る駅やからいうことにつけたらしい。この駅名のせいで稲野の村役場のある、千僧・昆陽あたりへ行く人が、伊丹駅より近い思うて、よう、下りてはりました。そんで、御願塚村で道を尋ねてはりましたわ。

おわりに

この調査にあたり、下記の御願塚の方々に大変お世話をおかけ致しました。末筆ながら厚くお礼を申し上げます。

籠 勝次 氏 籠 惣一 氏 安達 清七 氏 山内 清一 氏
玉木 天酬 氏(御願塚西光寺住職)

善見 信典 氏(御願塚須佐男神社宮司)

伊丹地名研究会 稿

(文章添削責:足立 繁)